幻の音

大崎千夏

重い物音には心臓が跳ねる
あの時のことが繰り返されると思って
床に踵を蹴り下ろしたような音がして
祖父は浴室で倒れたのだ

気を失うでもなく血が出るわけでもなく
脳が損傷を負った人間のうめき声が響いた

私たちが素直に知覚することはできなくなった

バタン、と冷蔵庫が閉められる
ガシャン、と便座が下ろされる
ドスン、と祖父がソファに座る
祖父の姿を確認して胸を撫でおろす

生きていてほしいからなんだ
聞こえなければ
見ていなければ
冷たくなった祖父が転がっているかもしれない

体はもはや意思と切り離されているのに
些細なことで生死が決まるのに
無数の罠であふれているのに
祖父の世界は今この瞬間と遠い過去の記憶だけだ

物音もなにも聞きたくない
疲れてしまった
苦しむ祖父も見たくない
元気になってくれないかな
願ってしまった

見えないところで
聞こえないところで

で、くれないかな